あゆひ抄　三

ホ 2
1520
3

あゆひ抄巻二目録

十九家第二上

曽家一

何そ　つゝむそ　なゝつそ
何こそ
何こそハ何　めくら付中のこそハ　あくろ付乃こそハ
何そ何　めくら付中のそ　あくろ付中のそ
何こそ何　めくら付中のこそ　あくろ中乃こそ

乎家二

何を　かゝるを　なりきるを
何かのを
何てを何　何とゝを何　何ぬを何
何をも

波家三

何ハ　まちむそ　かゝるそ

門 ふ加2
號 1520
冊 6-3

毛家四

何も　何ともや何

何まそ何　何もこそ何　かねてもこそ　何もこそ　なかるこそ

何まゝ　何ゝ何ゝ

仁家五

何ま　何ま何

何まで何ゆゑて

止家六

何と　いつのと　かのと　ふるとく　かるとく　とかて　へるとく　何てよ

何とも　なのとも　かのとも　いへとも　いへとも　とかとを　へるとも　何とす　こゝす　かとす　まとす

志家七

何し

何しそ何　何ぞ何

何しも　義ありしを　かへすしを　何しら何かとも何しりて

何し何ぞ　あらましよに　見る中かし　すしも

あゆひ抄巻二目録終

あゆひ抄巻二

北邊口授　門人　吉川彦富　井上義胤　筆受

十九家　才二上

曽家

凡［ぞ］ハそれ［こそ］ハこれをつゞめるあゆひなり先を
おしてかたるをこれ此事物と一すぢにさしつめていふ
詞也たとへバ人を石を玉と紙人乃あるなどもありて重なり
いぞ玉ハ玉よ石をバ婦る也又玉をとりあつかひてわのよ
まとりてもこれこそ玉なれといはん○［て］いふは［こそ］
ハせん［ぞ］ハなるをあやしうゆゆしく［こそ］ハせう絶なり

心にかなひと又詞によりて[ぞ]とひろくいひて餘れるはいはゆる
う[こそ]とちらくさ其ねりしゆゑくもあらぬさすべらし
承うしくものを[よ]◯ぞとらいいはあるもまたおのとぞれ
そをかくもあれど只ひろくいひて終の文のひよくしら◯にこれと
いはず。わくむきをのうしはよりねこそにかけれども終のかたのハ
有しとせらくいひ留めこれるとなとくなるそこれるけれども[ぞ]ハゆく
[こそ]ハつよりとと又たと今のいのひのもくいかをのかしのし
らまのこらみてよ◯そとぞはらむきいいてへ此のすふてあらす
とりみてるあ秋くよねゆるうをそに◯をとといいうあく
麦をもこのうのにしてい悉くはりまこれをさこれはかがつ
てゆくく詞とかるなかすへて此一家とよりて始をと

抑かくて見るに[ぞ]を[何のしるし][こそ]と[ゆゑかかる]
と思するも此とわかりとすまえもあるぞ◯[ぞ]ハ物のかやくと
まきれたるとぞのまく何て篤。肝心のあをいふしまめは詞
也[こそ]ハ外なるのをよくかぶつきて。肝心乃こゆる極にて
おく詞なり◯[そのこそ][こそぬそ]あるがらくもねもいふ
きとこ結ぬえきのひとつかぶえてよめるなすくれつくは

何そ

二例◯弟二[うむるぞ]とらふ 何ハ若壯のの御事也 里[ぢやぞ]とらふ。
壯をとうぐる時ハ[のぢやぞ]とらふ
人し里は立きれまりそこひつをも地名そとくはいまし地と
若よめてぞ[ちやぞ]とるぞをとまし秋ちら雪と命かくられ
◯弟二[うらのそ]とらふ 何よ是同じ但歌とよく 里言同。壯をとうけたる

とへ のぞ といふ文字ハてにをはとかくよし

於 こゝろもさへ見ゆひとかへむきされ何のかすをこゝろよふひとくよそ。

曰 和歌よする伝乃古集に綴つゝて世の志りをみなかゝて　この命ぞ

ジイヤ そや　ゾサテモ ぞも　ゾコレハ ぞこは　キャゾトヨゾイヤ ぞとよ　ゾイヤサテモ ぞやも　ニテソモタマ字ヤゾサテモ よくるぞも　古见なれ

役拾まへりかゝるは　おなくの命をしこゝろゐ我をおらん

事となれるも此ゆくつめいつるも此にて　あるとよしとかりく

ゑあるなるやむりのゝ命もきこめすそてたつむ。あかのうちよ

いそくじかん命 そも とこそよくはめてかれゆ そも の ぞ すそて よりし御

のこそわかしらめくかこす してよむはなりとかへ

ハ若せ 若はし御をとゝる時里 そ をは のが いらかし出きをとゝる時 乃が

二例○其一 めくるすゆのそ といふ 上何ハ若せんの引麗以御あり下何

手すりてかる ぢやそ とつめてかけへし

大かゝる風をとめてことしてしつるまいハ人の心にてなるもの ガ ギヤツ

そのうへまゝの獄るる形の其形れあるそ よもれなどいえましあのを ギヤヅ

○其二 あくる中のそ といふ 上何ハ若せんの誰り庭以御あり下何ハ出せんの引麗御し 里書ハ こちハ

といふ表ハ 何のしるしも といふ。但上何ハつきそて四種あるへし。一ハ若

かる時 のが とゝろく 但あく書ても相そよりもるとむかへてはまへ ひ とうけ也

そ其の形そゝるなと こと とゝろくまへてひ中子のまそてやと更へ。

ことくおかいにへの時又 と とゝろく書さるへひ 二出せんの言て きる時 そ を

其二種のことく ぞ を上何の出まりてもなし

上何乃よふ出まりて四種へし。三出きの引麗ある時 こそ が 乃が

なとゝろく四あゆひうきし好る時そおてゆうをこゝろあすしてあそこち

其里してよし。又下何種の引麗をそこゝろめよそなるきよいきすく

なきるを場をまかゝる詞に ぞ を え にあして。下何手 れ をつく

るもよし

ゆくへちる花のところは知らねども心ありてやにほひそめけん

心ありて見るよしもがなさくら花ちるをば人のをしまざりけり

梅の花さける春へはしるくも梅山やちるまで中空のうぐひすぞなける

ありともおもひそめぬ昔よりあはぬ人ゆゑ林の中のかれはて

ちらりぬくちるそめてもさ桜花ふそ世中ところのなどは

しられつゝみけるよめもその葉のいつのかはるあはそわりき

まつる歌とくる時にもあるなりものねなきけれどもこれなりき

ちるの山さしその桜よもしはるかおのみなくに八重もの鳥

上は	を	とて	ふえ	さ	よ	も	有をつき下こぬ	ぬ゜	なるらん	まゝら	
ソニ思ハル	デアロ	タデアロ	タワソウチサテモ	タ	タハ	タニ	タノニ	タコデ有タレド			
べからん	ならん	なりしも	し	しは	しに	しを	しかど	と手合見て都			

かくてこちあひの例まゝなるべし。ただこの詞ある歌

はおほかれど古今にひとつふたつまれなる歌もまた

あはれなる中につらくあはれなるすをあはむずれあはれなるよみ

まことにはめの なむ てこちあはれを枝なれどもなりけり。例

のかなる詞をまでいはでおほ時ともなりてめくらし例と

す。又おほくもありてある例とすべし ○ こそのぞ 序

こりなりとし こそ とよむ歌。又のさ 詞とへりて ゆゑ

とよめるも こそかれ ものりし みそかれを人ものあかの袖のこ

ぬれねそねまての歌也。されりくも 仁家 まゐりて ○ 抑その故

おほくそ有けるなどこりくよめるを。ちきあくをて梅まゐり

ならんるくちがけるとゞ中ころ死人つりまゝかとは 不倫 と通り

そすゝのつらにこそあれといふことを里言にはこされをいふ
さし○上句ハ壮麗の引麗下句ハ状の引麗にてあやそ
うれしき袖くちてかへしきこよしむを中昔比の人あやうう
まてさ時のかひきさねとかへてをよめり○うそにハまころハ
のこそおわきをこむそハころ○集古今又夢くのおといそ
さやのなりけるといふ心のあらためつらしき例也

何こそ これとつむるこそといふ 何ハ後條又同

後又於 あしろのさゝへ手もとハ露ぬまともかハくも乃うへにぬれこそ ○忍
川のくにのすまにハ旅をみ山しろねとそあはん事をのそこそ ○思へ
黄方 こひしきうきまきにそこわれハ袖ハぬれてなきそ乃こそて ○○九七
しよるのあ右につくゝゑのことくいかにこそ下ろうち合を

くらへてなくへきなり
これハ中昔よりゆあてよめるあゆれ也後風雅
集よりをけよこつめあまてにぞ、ハ次乃中のこそてとかへ
里川めてよろこそすりもおわす例こそねもなおわきるおもしろ
とおり

何こそ何 これをと中のこそといふ二例○第一めく守中にこそ
とい 上句ハ名毀の引麗状ハ下句ハ名也 ○近むしよりおさハ兄てぬ例也○里そ
むねハ二例とあり同しいれハ奥さらい僻此例ハ下句乃下にきれ
こいふとはくらへてむ身無し
鉄石 ちつよそれよひのこそよ地にいと初身しくれわすりの色や紅 ○九十二
鎮子 かきをとふにいのそのみましきくさそうつて後きの冠山の舟あり ○七

○第二 あくる中のこそ とて 上何ぞト問ヒ下併ハ其答ヲ曰 藤伏術也

春の夜乃やみはあやなし梅の花色こそ見えね香やハかくるゝ

さくら花ちらハちらなん山川乃あさ瀬にこそあ波ハたて

わつきて神こそ手折へ梅乃えたは何とやらんに常乃如く

枝よりもあだにちりにし花なればおちても水のあわとこそなれ

うぐひすをかすむ峰くかわの花こそわかれ秋のかぎりく

志のゝめこそひらきける春の山より月のいでてこそ秋くれ

あひまくほしハうすかくあまのかきつきれぞまとひそうすれ

何にさゆくひとりわかるゝぞこそ海さまこひのこゝろそ

我なひのこむろ乃山を秋ゆきかぞこそ見えぞすれ

序言かくいへることく梅をむの人に見る詞也又こゝ梅を

えらびすてゝ香をまにとりてこゝろ也 二句乃中より

むつ人こそとあくハあるは上言をわかくきてぞうらの分

そのかむつよ真言事梅をとかくてよろこぶ乃こそわかきこれハ

一の里てをかて足しかうし こそ をきれのる詞の上あるかな下さ

何よりも	いつよりも	これやるとも	なんの事かは	おでハあらり
なにのゆかし	何のやめて	何もおずふ	そこ思しよう	これとちがうそ

なと梅の詞をかへて見るべし。又詞のいきかひかへつかる所を

ハ見るべく 先だつハ と里げるもよし いこそ ねぎ ○ えころそわく

らねるとの類なり ど ぞ ぞ るとも上何 つげや 何と有れ

あらめ	デアラウズレ
らめ	デアラウ
けらめ	ズニ井ウズレ
てめ	テ置ウ
あめ	デニハウ
しつ	タゴデ有タ
らし	ソウナ
らしを	ソウナサテモ
を	ノニ
ま	。
と	。。
ともとも	トモ

あるをとかまうけるこゝろ是なるべし

すべて【こそ】とよめる詞が係くるを尻ふにいふへハめ
けつる詞ともおなし事まきと里言をあつめてすゝへめて
かきりあるゆゑ也。古今にしるしぬかくそ手かれのなり。又歌
あらねと蛙時田地手高きをあつめてよれる詞なをとりあつめ。
をよひりくるある詞ハ余まとおほし　是つるはけゝる事ともあかれ　○
又下ニ【と】【とも】【とても】【ニ】るとうちあへるハ里同。すべてひのへ
ものあるゆゑこのハられ右の【と】【とも】以下をうちあはせる
と同しひるあとするゆへし。又風雅ニハ下ニ【ぬ】るとまあ
つるゝあるとなねきる例あり○又かゝるとうちあはせのゆへ
【中のこそ】いへのことし。後撰ニあそれてよまこゝつてこれらの
ことゝへ歌や人をまつよけるらし。古くも有まさうけ給へそ

ゝのうるゝにこもやハみよそとるゝわろるふたろしめ嫁ハ
家と以ことすそつ□むをロのそろふつきゝ。かくあるや人とおゆ
あらんとつめつおはくの有をんかそことつまてつてと例のよも
詞そてかゝりしるとも。又定家つゝこそのある大殿西秋
の歌とよとなれつるハ。古今このまゝてそかくせる例なあり。
大旨ニいよつゝとし○【そのこそ】序言ふいよつゝとし。かのえて
い将無し。よつくるの今及そ○又つゝ○詞を無すて
【ふらそ】とよめるなりなり。上句をまてつゝ也。後撰にかゝれ月
きるれまりふ訴るひのまゝれこそのかゝれまるゝ。世をまひ
あるりくろ【仁家】ふいよ

何ぞハ何

上下何ぞ係るる　里言ハなにぞ全【中乃こそ】すゝ同し。元も

めぐりあふとの二例あり。めぐりあひは千者にあらぬ也。
於無
風吹ばくもゐはる乃末葉に露もなし。むしろとぞ。ぱ 神のみ代の風。
いかむ。りへあはぬ地へまみ人まる。ぞ。何ヨリモ ぞいふけ人なき
なにはなる洞の神のそはちるぬきさのへかくにあか。ぞ。ぱ。ぬめ
石上ふるののしかとなかふかくこそ。ぱ。みめあのすま有ける
枝
わがやどの世のひとしれる君しいくらぞかる。うきしいはむ。ぞ。ぱ。ぞめ
大原やをしほの山もけふこそは神よのことも思ひいづらめ
又重詞をとへるは。なにこそはとともある所 なにそ なにこそ ると より
あらもて万葉へし。後拾遺には志めなるわかなるまに（？）らそへしもを
ゆらかにまくとも全身にあしねて下なけるなのことすなる
く無也○凡こそはとようそ こそと同じきる 乎家ふけいぬ

乎家

とのみ をとれと めぐしは。いかんや とぞ はつねほと をのむ
とかくめる詞なるをも。二詞よりて見しまてにそこの物語く
わかまふらめてあれど。今は行しなへて尺するも○ まことにいは
とらむ詞の名を 毛家 するなし

乎家

凡 をと は上古よりはおえれとのを立める詞なれ。後世には
をやとの脚て。これ行ける名のこれわか又入見てきらなや
何をとは文てにかくるも。はへの行をかすめる詞也次ての
おまきこそと万く世のまちのし
何をと
何は呂氏脚詞處也。上世みて從ひきてそおひをきるの
おもわひとやかにすとよめか中むりしかはえまれよ。二例○ 才一
かるまをとつ。里云同。しをとこそ也紙をよ了詞語なきれぞ。分度

同じ心。他の詞に麗をうけたるをは【のを】と里すべきもよし

【とを】わし入いるゝぬ詞のなきゆゑ。此つゝをそ傳らる。今略きて

○第二【殊のきゝをと】といふ【抱をと】【ある中のをと】をといふべき。さらに金ぞて

【をと】のことよめに二様あり。一若をうけ。又あゆひのみを抱てかなふ

詞をうくるは【あるをと】にるや。里【ださやのは】といふ。二様をうくる

【あのをと】のかなふ。又【のを】とよむも心へをうけ。里【のは】といふ

しら露の色はひとつをいかにして秋の木葉をちゞにそむらん

露をなとあるなるものとおもひけむ我身もくさにおかぬはかりを

又月影はいかれのそらもかはらねとみるさとからの秋そかはれる

けひかのなにそ照るくまもなくしかて世のなかは様あれいかにを

【ぬをと】ヌノ二 【しをと】タノ二 【いどをと】一イノ二 【さりをと】ス二井タノ二 【なれしをと】ニテアツタノ二 おもたい抱

何てを何何とを何何子を何

上何ハ〜乱れのえみあゆひの例をたへし。下何ハ【誂屬】と【将倫】とのかなへす

里言あるなる詞なし。心をとりては你我のなるちるをさすて。

【誂屬】また【このえう】【将倫】また【このたう】と里すべし

きのつまへさゆけばかれのゝくぬれそちかへ何かはあらしとそれ

こひしくて下おもへ紫のねもかのゝるもいろはにいみめ

立とあかてをとてんかみち梁はあとかくともおくはまきらし

露らかくてよのこなかもえはぬれもあとももてゆらん秋なきぬも

折拾きこもりてとこそやとよめる例あり【将倫】のの何れ同

何めのを

何ハ世の同 麗御あや

里同又【のは】ともいふ。全よいふ【もゝまを】

かすて二様あり

ともはたよしきと人はたなるめとあかれてさかむきあるものにを

たちぬはぬきぬきし人もなき物を何山姫乃布さらすらん

しかのを ぬかのを めか物を けりのを まし物を なと

又人の力もなくて物を何そハ露乃ある物を苅とハ定家

乃「何をと」の二例ありて此例にあるぬことも猶あれ中なるへし

物の字乃かはり「物隊」りくへし

何をとし 何ハ何を乃

「何をとも」「何そとも」も同し心なりあゆへとうち○とある。

里「何とこれ」「何をかれ」なとハ又かなわ

秋乃夜の露をハおきてなかりも虐の声なるもの乃へさもん

あふれのるかふすむ虫乃秋のうとねをとうなるめよハ綾ちうみし

あきちの花をえあまぬかちるも末をえましてとちうない

ちつのふる秋の宮こ紙てもるよふしひ日かふ花をうちれみ室

雨まの原ゆきところしなり称も物の中をえゆくろ物のえ

松もおもの命え「をとし」をうちれくさしよかられハなむ明かあ

「何をと」をよむまうち流れし「をとし」をいふまさうしれる事かり 波家

子いよ「まのうえ」よありもてなはへし○「をの紙」をとえのと

あゆるゆきくもつようくもようてなりてく出くるあなんなきらく

示らうてなくあわ、又古今ハちるとりふさとハなすらいとうちすむ

「世え」わしハ「縁えの之」とよい無し

波家

何ハ 何ハ名詞御紫の引 麗説同本麗伏起

いなやすき詞也、物を引て所きてとわち也。

さうあうち物とさえ詞もお秋か里言とふかろふれえ引きま

不及くくしくいるる二例あり○才二「をしえ」とらへ 名詞に紫乃引 麗説もとうる

あり。御もちゐなきすくなし。但状の沙汰とうろ 時里かかんかとりてはいるよしもすてよかへし 二折あり。一若須事乃雅を

うけいろき里同。二状の雅をうけいろき あらあらハ なとして 以ハ前 きいの哉と 同じくは よくハ空

の哉 あり 三折紫乃川鹿をとききろく のハ とりふ

○ 才二 ぶるえ とり 紫の同来鹿状なとうろ あり御もちゐなき古へし 二折あり一紫乃筒

鹿状をうけいろき里同。又而まよりてそ おようて とそ里すへし

同しくあれそ あられいの哉と 又 己 ともりて。而りするとかきとさし。見のくと花のちる

るとの哉也。二紫の来をとかるハ うあらハ うるらハ るとらて又状の雅

をとかるとへ同しく あらハ なとらて 同しくあるハ るとの哉也

明めこのうき ○ て我ミゆる君のかに年えあらぬ出りつあま

よむもつる也。但川鹿をうけくハ拾遺とりいうる詞し侍あり

いとのられきむちいくられをもいまけミゆるいふれをとそしめ

毛家

として。ばよろのめ中昭乃人ハこみえよみく後拾遺まではハ

よおり。おかのやも我る詞のうるかれを。近昔よわ後ハ是

をきてつへわ ○ 古今より何をハるそあるうひまいうてハ秋乃

おりしてなく。後撰まいうくハ露のかくわ而えがやうまうさ ○

するはいうやくうよ家よの名也 ○ 凡 え ハつ三可れもとを

して歌をとうく今古あゆしゃ也。古とも年かみらく神よろ紀

へくわそ出るむ状ハのきおとえん人ゆくあげしもかみらくを

といるくめのまへ今ま紀葉なるるへし え うりしふすへてくも拘と心

画もとりいうして以て詞也。後拾遺集乃詞出をそば也て

かりし侍へし。かゆうなるると まのうき とかて

何も

何ハ指所ノ辭疑ノ詞也　末をうくるハ歎属ニ挙　里ニ〔なにも〕〔なにも〕なるといふは　かろく

ねさへ不及引きのみをとらまし次くいふ詞也　物ちかく

いひくらし麗をうけて八〔何も〕と里ス　若御後書をうけて八〔なども〕

〔なども〕といふ

〔何も何にても〕とまねる八里ニ〔何もせよ何ぬ事ぬもせよ〕とも

又是こすも外のもあら後もの類也

何をや何

上何ハおなじ同し・下何ハそらおひ　歎属きぬ中のやと同じく心得へし　里云〔も〕を〔も〕添て前條のごとく

なりゆく〔や〕ハまゝしてやう〔今〕事〔上疑属〕といふのうし

きしるはこ後者のこまことひおや然て人人合あらそのこゑん

秋ことくてれとくおもふ〔今〕もつれさてもやうをかと世をなくむ

又する道を尊ま、かれがをし後なとつまをあきし人のこ後ふせれハおちるん

何かそ何

上何ハおなじ同し・下何ハそらおひ　曽家わくる中のぞの下ハかく　里〔も〕をおのこゝく心得へし　前後條の

めくらして下ニ〔うに〕又〔八又後いは〕とつねてなゆへし

うらかなまくらり

後

もも川なのかくこひそうくをなおもなりし後の合せにやそやくらん

太和

いろやまきし〔今〕日のもとから嵐のかの夜の事の歌に道そうき、かゆそつく

勅古

玉ならよせきをれこえれをのしへ〔え〕里もおることのうつろふさうするが

後條乃〔何もこそ〕といふものゆへ詞のさきをひおもへのならし事也。

まわくハ占まめ此〔い〕とあしましてよめり

何もこそ何

上何ハおなじ同し・下何ハおなじ　曽家中のぞの下ハ又　三例○次ニ〔かねるもこそ〕といふ。

かく條に此くる今すらし後よく推しあててよむハあか。心得て〔こそ〕と

めくらして〔何とも何も何うそらちやに〕と里ス也　曽家ニもいふそのうこえせ

後拾 梅のはなしばしおりてこそむしはてもこのよのむかしのかればども…ぞしれ

後拾 人からへのこゝろしるしぬるかなきもかひなし物ぞとも…なれ

○第二 [何のあるもこそ] といふ 上下のうけは第一よりは少く同じことかゝる つきて二つの句を見わけてかくへし

事もあるかと思ふへていふ也 [何なども何ぞとばや] といふ

拾 玉かづら遠ければぞ人はゆきゝの道のまそこにひとき

拾 まろよひとねする萩の花しかあかしてやりてわきぞゝたる露ぞおれ

○第三 [何まこそ] といふきまりて何めけれこそは何めるといふ也

こそて [何かそ何わらぬ] といふ [何んばう何ある也とて] といふ

字をあらそて見ん為に此詞中昔よりよあらく中比の人をふみ

よあか [むのあるもこそ] と云は何かなるへきねともちの事をつくるより

てもいふなり

金 うつゝあへまはそれ（ソレコソサウモアラウズレ）わかめ夏ふ人ぞ人のとりあるとみ教のさゝき

まナンバウぞはすゝのえなり（ナンバトテ）ぬるとしがふかあるとこそれ物を宝花物

[こそ] [こそは] 何かるかよし [曽家] よいふつうし

[何ぞや何] [何ぞそ何] [何そこそ何] 之の詞がかけしもすむ御

なるうちに [何ぞや] と [何ぞそ] のもかへはかゝるめる字をたえ

よみか。但 [何ぞや] はねのひねのやめあらましにはかさてよみ

[何ぞそ] はあるる様の字すゝむしきあらましをよむしや

[何もこそ] は右二ツの字をもかひ。又第二三章とくあらまし

書るねはとをもはんや○何もあれ物しも有事もあるかも詞の

いきあひ何をこそあるまていふ同しきうしくは [志家] にて

何ぞかし

何おきし用 [何もあるまじ] をひきあいせていつか同しもかわれぬ

たゞ又時しあれはかくこそいはめかゝらぬは大かたの詞なりといへとかさ○

うけてよめる哥【何ても何いでも】又【何とやらむ何ぬることも】又右

附なるとうけたり【何はあれ】といふ時は只【何でも】といふに属し

君とへいひこゝろあれはいつれみをまれ(テモ)(イデモ)かの○に風めつらしきまれくにゆかぬは雑歌

こゝみるをとかむる詞にして又ものあらくかゝりとゝもにこそとゝまる

はらこそおほえまれはしなるやうにしひふるまゐらす詞へ古今龍田記にとまれ

かうこと皆一わたくやりてん哥とある

【何とか何と】上下の何は大かたの詞にて一首の詮也但かはよりは下の何は何すとうけて今春き

下【何すと】とよめるはかなへて【何くろ何あんなる】【何くろ何くら何くら】とうけたり【何くろ何くら何すれ】

と里に何すらむは【も】の三居あるへくして物なとさん世家にもかよ

(坂)神無月の夜ふかき嫋(タリ)すかんけ(ナンダリ)の何たまふてあなたゝしくれてものゝためにきたまへらける

(頭書)かくはう

るまはかうらの吹風になるとてはつはのくもあしぬみえこゝろえこゝ(注)

いせ物語にも文字にてみるに見るともいひ抄けは御をとうけたも

こゝにいふはいつはかの○さ只何と何も里に【云かうれ何かるくかしてと云】

わすてこの【こ】すはのうちにも上の例を図してみるにありてあり何

物語には此みのうちにあるはあるものいふ何にあれとこの【み】すし

皆同してうるまでこれとみとなることに上のうけまれて志何し

蜻蛉日記にとあるひかくいひすかひかくさまからよみてある也○

要之集にわくいかえみこゝゆはいふ事をわけて古今のかゝりつゝかく

すなわちくわかゝえたまふをよめり○一万葉て人【今】とことに志けこ

こらえまゝよりけるはこれに暗のほどれとも大かたの詞あれとこれ

はし【み】にあらし【義隊】のとゝまるかなるかな

仁家

何は 何ハ名所御[illegible]麗[illegible]又やそ在の句也状の事をうけて[illegible]人ある[illegible]るまるむる上つ句をうけて中昔より[illegible] 何は

これは事を里言同じ事の中に物をやわすれてしてにはの詞也

こまのふしる方の事をうけて里へとにも[illegible]又と[illegible]

にはは[illegible]るる縁して里で里に又[illegible]麗をうけて時の[illegible]

てふの「のは」と「乃」とくらべて里すへし[illegible]度[illegible]

何よ何 上下何事の字例ありて上ハ[illegible]也下ハ[illegible]て[illegible]なり 里すを

かみくるをにはにと[illegible]ひ同じきもちにいさ[illegible]あかき[illegible] いさみに[illegible]て

こう[illegible]らるてある[illegible]て[illegible]打[illegible]ちの[illegible]ゑ[illegible]

をと[illegible]つのひとたるのでゆとやわとは[illegible]

[illegible]ゑんぬものにやまをつのにはに里 何ぞの何と

にぞ 此何「のミ」と同じ [illegible]

後 ありとのくにとこれ山のかたになるほと[illegible]ことてあはすて[illegible]

後拾 ちらし[illegible]てかすりにこれは[illegible]風なちるしにと[illegible]

[illegible]よみありて里言の[illegible]ことにゆる[illegible]あかされと[illegible]

右は[illegible]とかやくそにはへし

後拾 [illegible]こられ[illegible]ともあき風をきりでにあそへつ[illegible]

同 [illegible]けかる[illegible]をとふくてゆる[illegible]のさ[illegible]

又ぬ[illegible]あそぬ[illegible]のきまそゑにけにこれハ[illegible]

なとさ[illegible]のは[illegible]をとあ[illegible]へし

何ぞて 何して 何ハ名状のりて又やそて在の句也二詞全同里「であて」とも

後 うらひとのあくたる[illegible]まて[illegible]たしのかあくすもあかる

六

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつはもとの身にして
山ざくら花のいろ香も絶やらん今こそ盛にて口おしかりし
時鳥なくねをとこそぬれていつくらむ月をいでてまと
いはでこそいへるは世に例あるぬことなかるべし

止家

何と 詞のうへにすゑてとまりをあらする詞也。すべて六分
詞とみつゝの詞、又ハ若と花、事と東
詞をとなへ、心ゆくまゝ中ものをあらる詞也。ようじめて
あかともぼくあるゆめどて歌の詞、但此ありて
とまりあるを止よつれなきらば、かさし也。此例にあらす。尤
何と何 何のあらはへてる此に此何同じ位中にて止る

えこの詞、下ハうらの係詞あり。例をとりて知べし をと 手
なくとへらる詞あまた、それにも心の花わかゝる。要に
不ろもかゝれそ〳〵いはず。及び六例あり ○ 対一
いつかと とは 名頭所の素よみをとこく同じて同やの守す
のいふ、是同、不及詞前、此共ハ詞をへてそうけ取とも
とは とまつにもいはざることをいへる 又此ことをとゑ含て
よめる歌をえらびて とり のあまうらへてまへし 川麗とうらあそ
ハ常せざるなはいふる のとのちかき を望すへし。後撰
秋乃よの露をきて寝たる袖の人かゝのあかゝる今を思ひしん
あらしてわかる袖のしみ。袖てらの吹るみとつまにゆく
まのみたらゝにまて待つ月の影のれくまで月日来何

末乃句なきさのかといひくるとし給ひとはし給ふ句ちもちさせとは
ここ八句面のひとつよみ分かる又[とイ自][とうで]（上ニヲチヤン）ころしゝえ（下ト云ハナラバ）とう句のわ只に（下思ニ寄リテアルヲチヤ）（下ニテテモ）
見不称する術をいひあるはいくしくあくうかり及らに
名まいくの條下よいて寸ほひあいすへし。ぞけを[やと]かと
[何や何と]（何や何ハそく ぬけのやせ）此三句のはしほ[活]とといひあるはし詞乃
刈めもありてぞつく乃うきれきてなかられ手[思ふるを][ころを]ぬ二
ありけ[思ひるを]八[乞]の下る分みをとひ詞をとらへく分るへし。古
今にありそのるからに生きやうもちはまて後撰にのかうえ抄時りをむ
きうへ川うれちはる事あはるあるてこれも乃心えをとうる
きこる教なかとしるへし[鼓屬]何りよといひてあるいは乃のうてるを
似ても

鶯乃心のこぬとてぬかて梅香のくれまとかてのこゝむ盛りのへるやと。心三三
山家 只きくとゝ山椎のしら葉のかをそむかくはそ梅のうち分きくえと。心三三
何のさきとも世の分舞只やあくはくとしくあるや只きくえと。心三三
千又読行旗 よみまかてなつらはや方くらむ。心三二 今ころむとまたのめ梅のあむ
[ころと]八[乞]の下をみとて樹をわてるを。よろこびくれ今く分
うれしる花のとみきて雪も変ろかし[霞]やまろのみとおりとって
あるのくみたる也。世継と分せられ報らいは彼れうかのはせ遊古
いみくぬるや。古今抄に門人許
又[とくそ]とゝうむも[只宮乃]とるれと[かくろとそ][はめさとそ][ろ今そ]
の三ありて一[ろうまとで]八此そ[と]とうむ中乃はいら又ねとまとてかうよ
も面かし大つき云思ふ乃こことを[と]よりは八かはよくあるて、ふかまれて

のたまひぬなり

命とて(トテ) 露をなにかはをしからむ もとよりちるはいのちなり(?)

二 わすれとて(トテ) はとすゝしとこそ(?) とおもひしかとも 世にありはつへし

又この比のさかりにはわすれやらるゝ(トスルヨミテ) なりてあはれはさのみならぬ秋風の

拾 うきふしにつけてもみなをとゝめてぞ うくつゆのよにをしむへくもあるかなとて(ト思ヨミテ)

三 人をとて(トテ) 見てても(トイフテモ) 人 も ゆくさきはかなるも里あらしの(?)まつぞ

志かとて(トイフテモ) わかみはれくもよりあはれさきはけりの数あまりの世中

いはゆる(トイフテモ) くいとこそ人のなをなさけうかるゝはそへいひなかせ

とても(トイフテモ) とも(トモイフテモ/ガチ) とてそ(トイフテ) はとて(ハトイフテ) しとて(トイフ思ヨミテ) すとて(ヌトイフテモ) 聞えず抄

又 何と何と いふさまのぞむ例あり 何といひても何といひても

といふ也 古今にかくるとあるはとめのさまのうちにといふ字の類

也 又かくとさなんとあるは 此例のは将

あれと とをのぞみこそいふ事をあらはしていひ(?)をさし○いつと

ともさく ととは みそうてかくいへ今にあらばふの古歌

あちるとのみかはしへ人のみかとすれをそへての数 又へし

まるぞといふむも是也○ と乃字は今の詞にとふてはなし

おりし 次の句にかゝらずといふ事とまことにあらず

かきもとあひの ひとめもあり

○第二 示の とといふ 名をもつてるをそへ語をいへ是ろも捨へて

いふたを和歌にて例の とて と同しく 又 こゝ事なりて と心得へし

但是は ま といふなる御名をかりて ありて と思ひて又

また ホ といふを見よし

わするゝとあはれと今はいふ袖やあらむと人あらむ
さくらばなちりかふ雲にかすみつゝ月の光もさだかならぬ
人の心をはなれて[illegible]よそに見[illegible]
末の心やすむとい文一句もある。此外の[illegible]上つゞきたる間
ひとつにかへてあるなり。[illegible]今はいふべし。又つゞき
よしとかくとよむ詞と大和物語によりてとゞめたる同
○第二[さりとも]といふ 名どころ御引歌なども取る[何とかや]の[illegible]也。里言同。不及
引ぬきてよむと[是]此外[illegible]にてよむは常也。是と相違なき
ものそてよむ也。下にあるべしとおもふなり
○第四[するとも]又[何とかやとも]といふ 御同廃伏 まとうく [以ても]の[illegible]也。皆当
てよめり。後條乃[以とも]にもおもふ。かつ[illegible]里言全同。又

[何でも]とものひとつのひかりにありつゝ[何それとも]あるもつゝ不及し
所[なれとても]（ハイツデモアル（ケ）ドテアルケレドデアラウズレドモ）[ならめとも]みえたり
赤染集にまでも見てとなふるわかとよめるいめつらし 例之
○第五[いかとも]といふ 事の末伏の往御おもかげ 色のおもかげなく行すみてよむ[是とも]
とよむ同し。里言ハ「で」と心得ていふべし。此のそよむなり
金葉集 こうしまくよ私はさかとみえてかへるとも見えてとゞまるともきつめやき
新古 たのめずも人をまつてはねぬ身とも知らずいさよひの月
玉葉集 あきまての事はいかにも人しれず色のゆくをゆするといはむ
○第六[くるとも]といふ 事の往をうけて すゑなくりなてそとしくあるとの
類。里言ハ[ころ何とも何の何]といひ。但下よ[ろ]をうけてある時
ハ[さあ何とかてつる]ハあるといひ。又[何と名のつきてつる]とも

又下にハ[志倫]のくつかへる時ハやまえて[さあ何といふ結ぬてハ]

と思ふへし

梢のもの吹てぬまぬるゝハむもしかそなへて其冬の色かはるなり（サアノ吹トミダシニ盛タ）

三段　うきすとてふりと立すしれ給花袖とそゝあし其ねりやまなん（サア立ハトミダシニ成ウ）

鬱茶　かくらくて人手すされぬ何とかく出すする事をとうしかそへかみ（スルホドノ）

又[何とし何]とのそくへるも同し心の今すてしつよきさゐくそえ

しくハ[志家]よいふ[何し何し]おてあるをていふへし

後拾　秋風にあひしあへて花落いつまとよ水く流水そおあり（ワラフトイ名カヘ）

いつまて紙のちすしとぬすむ三つの心ありしあるハ拾弐（アルト名ノ付クノハ）

古今の序よいまとしいふるものよかくらも是ある

何てよ

何おお條の一例よ同[にいふ]をひきあへせる世上つよふそ[何ちよ]

[何とよ]るとのてよあり[何てよ]ハ[ちよ][こそ]よかしさりき今のまてき

をと後まて[てよ]とたくいふ根よあるなと中むかしの人の口きさわ

よりかくるなるへしハ今のあまりあしとも御まねらえすおさしく

ぬのといふさを稲をとりしといふよハ謡よハある古いは古今てハ

ねぬてよはすてすとハかくると世よ画し又古しよ歌てそのを

たのみそめてきといふ今のハなたとふ[てよ]とのきのされつ事よ歌と

いふのそ人世のめかけといふ言そら非[とよ]とのしたるは

例の證なのまても画しいそ言ほ世よへくもある古今

四よあのをてくそかさてけしみる公しもあしんやうよある人

あるへからしてよいふ去あり[てよと（トモノニ）][てよあを（トモノニ）][てよ字（トモ〇）][てよ事も（トモハノ一）][てよん（トモニテアラズ）]

お見もかわ

てん てゝ てまし 事を立てゝよむ歌に皆 とへ といへ といはん
のなきはあらずとはいへどねてをゆかしむことをいへるを
うたがひといふ例も一首なきにはあらずとかくなるお
但八重葎して門させりてへば古今集を拾遺に とへ と
うけて後撰の中にあるをも一ッといへり其本にも
てん といふ詞を例の證本のまゝなるに文拾遺に撰して
のみやこかりてなしけるの三体を挙ぐこれもこれにかなふ
おのれの見る所にもしかり例の とへ とかへりにもかなへず
故その例のみそれにあるとはへといひにけりとの例也 何とぞ
何ぞ など事もあれども語くり合を捨て訓点あり
雖の字をしりぞむるを例なり

何こそ 六例○第一 いつのとも とあり○第二 かのとも とあり○第三 どのともぞ とあり○第四 誰とも とあり○第五 何とも
といふ（以上五例はけさ歌よみの 何とぞ の一二三例にて）只がなるの一二三例にて ぞ のとかはる也 ぞ は 毛家 につくる 里同の心
八 とぞ なぞとも と略して中略し 何とぞ の字の例に
心全同 ぞ の字あれどもなきこともかくしてかく同へしかく皆
○第六 へるとも とあり（字とぞ詞と云て何は名卿事の後撰に出）里 と 隠
てあるも と ひとつて あらい 事といへる時にらに あらじ 隠てい
すいかりもさて又 いかにとも するといふ字あり
仮なり神とも神とかくるなどよりて上代ゆかる例なれ
と使ひ用なりや是るにぞも近昔より後世まで例す

ほどもなくいつしかたえんとてかわか世の中にかく詞也

後 我ゆゑにあまかつ川のしらなみのあさくもなかくなかれをするかな（ユリタ殿デハナイコリヤ）

同 世中はいさともいさや風の音はむかしにかはらぬかたみなりけり（シラヌトモイハイ）

玄任集 ぬし忘れてこれのわかむしろをもとかみちを

源氏玉鬘に、二条とて女房のもあれなるもとうれ（モノヂヤトモ）

とてを、中宮薄物語にもあるか、むすめやおと云

はゝそとかくのか

何とす

三例 ○第一 なとす とて 事の末にかとうく御 里 廿 にして何す

すいかん 何する とて物なくは する の詞を例のかろくかへし

世をむしも君をしらぬおかねあさもかく（ズイブンカカル、ケレド）とすれとあかにくゝは

日のやとく道もなくまてはねもなかつて晴るゝ人をまおとち海に（セイダシテニツ）

又あやなくもすゝろなるとは里言 ハ の字をくはへて心得へし

○第二 かとす といふ 御とぬ 里ならて 何とするそや といふ

夜のよかぬをまちてとまりてや今宵もいつくに過す（トスルカセヌニ）むかしあくる間の也

又する例にかなれはあり

○第三 来とす といふ 御をとう家々 里同 又 とせん とも云

後 年ふれはこゝちもしけぬいつかは

我かみにかはらぬ人とあるさ

泉式部集

也 又 する をかろく云て

とけゝる日とかなる類也

第一例をすまそるや第二例は志のするとせぬとの

あるは此第三例にはまつことあるべき奇あるべくかくさまあるべし
を思ふべし此第三例の外にある也次に一二例は詞に加
てかゝる事はなき訓点に将の字をよみつけむもあるべく
第三の中にもやするの詞かなくては何とか事たる第三にもあるべく
あらば第一二をも見るべし

志家

凢しといふ語は此志の乃にあるが上つよき語をしゝ
又ものをさするとき其のものを主としてかなる御とあつる此心
をきくその方にてといふことをあらそ見るべし

何し
何は名所の往鹿称也
此しを志といふ之身の子をといふ
とい古事の事へとあり何とよむ事ありて下まきなるらけける事

上代にはあるか古言なるゆゑにさまでゆえにけるか中昔よりか
後はかるらずそそこそこのの事をいひあるなれ下に何は
とうらら言どもしはかくかぐつりと事とふべつまでと
まつはあるりゆゑにめてあるか文そのやうにしけるやうにあると心見
あるかこれら此志の乃かをとおもふへてあつるなかかくしつ
るとかうしとうけける時にば言て同しくかたるよくかくしつ
乃ゆをおりくこそて言ははうつろのをとそきて此時へ此乃
條しまいてありてそこそれしゝの言気あらはろもをとその第一二
あつ事し

何しそ何
曽家何そ何式例のこと
上何おほ同じ下何は
なお何まつ例おかり又しやとよむ
例あれと知りてかならずおかりかも

志れるもしらぬ事すて何をしそとのこうけたにはあまねく上世の詞をねのいひかねて

このうたはおほくこゝろ得がたく世のさ雨ふる頃なれば心にきこえし
つきてことわりは詳也。序言にもいふごとく[し]もじは字を
あまたしくおりくさす詞なれば下の[何いそ]よりかゝらくいへし
ちるやあるらん風ふかゝるかれとぞあるまでは春のあはれ
度 そ川はさす浪のたち寄すいつの間にかる姫のいたくもとふつ

何いそめ

上何おほ同し。下何ハ[曽家]何ぞ何の例に見よ 詞の心前條よりおなじくのえらず。いさゝか
かろく[そこ抱]によせてわかるべし。但[のくそ]
[う物こそ][なにこそ]乃この心ある
度 さくらあはのけなかつる[illegible]こそめいろふかくみだれ
於 うつろふて[illegible]めてうれしき[illegible]秋のをりかおもはれ
は 野へ[illegible]のはしるこゝろ人しこゝのきよ[illegible]めきこし

何ぞ 何をぞ 何ぞも

何ハ疑ノ詞也 この詞かくのうたは
あまの川雲のみをにて[illegible]何[illegible]をとひかめなん
こいぬ[illegible]をとめてうちはらふ袖[illegible]ちりくりたる[illegible]を
何しかく人もまたこえしてとしつかむいちまるゝ妹の[illegible]を

何をぞ

何ハ何の[色]ハ詠手あるにて[毛家]の[も]なり二例○第一
萩すりし[色]をいふ里[も]をとかかくいとこそに[何ぞかぞへて]とらむ
詞乃上より[何をあかこゝのせわたらむに]といふこゝあわとかくみる
知べし 但若紫の麗をうけるを[なくあろて]とはうけるは[なくかつれて]と
まもりてはべし御[illegible][これ又ある]又[この方家[illegible]も]といふべし
梅の花みこゝろもまつもつくは[illegible]すみとくといはれも[illegible]
於 あまちくこゝろしでよのみうちさみかゝなどの[illegible]もものをとふうすゑ
すべく[しめ]とよいゝあき一首のうちにいかで[しめ]とよし

うれしき事は右二首の定りなる所へ今ひとつを詞のかはりよ
よくみられよ【しも】の〻にをとくにて必ずさらめもかならず、
つゝきをとゝ定めてよめるがごとく今古の歌にもあまた例や今の
さかる事とよめる也今一つは例もなく見えてめてたき
へるを捨てて例もあれ例しを人のよみ来るもえといふ事ある
あるやてられよ捨てこのあは○ことる例しもあれ例しあれ
あらそひかゝるほとの事をさたやくての後ける
【しも】をとるにて所はあるものなり右二首のかはりを撰
よ例もあれ花のさかりしつかにて後捨て例しも無き
歌よく所の○乃ももとはなれにてかかれも乃二首られし
新の歌にてもといふ事をかの歌事ても又後捨てて

おもしろかゝる歌よりももあれ例しあめくもし心得
やはず今もかへてある秋の夜の花あるの〻にもといふかとあく
ちらてまの〻あかれ時もあれ例しもあまるとされ例也
こそわまに例もとわかしれとうかへるとげにめるしもてよし
詞書にはまやおかのあるといへずしてあまとうらあひら
しれもしていなき例あるへし○伊勢物語にみえし歌
しかとようのめちはめつらしき例あるか
【ニカギツテ何カ不知 しかそ】【ハソノ方ニシテモ ろ〻そ】【ニコレニカギツテ かくそ】【ソコレニカギツテ ウ方ニシテノモ そ〻もんしそ】等見たる歌又かくし
をうけて【うれしも】【例しも】あるとよむ例なれは例又【しかも】本おさし例書也
○第二【かへりしも】とゆふはあかひ里【それ歌なる】【きこえし】
とは又詞の上をよめるとして【あかつかち例も】と里すてはいはく

いつやらん

かきりなき雲のあなたにちる花を時しもわかぬ身のおそくなる

いくよしもあらし我身をなそもかくあまのかるもにおもひみたるゝ

秋の田のかりほにつくる人をとひはつる月のひかりわすれめや

よのくれくまきに山のはのかれそめにしをみゆるまてに

ゆもあらまほし すもあらん すもあらす てしも何あるへき

とてしも何すや有むし 等見たる格

何しも

今しはおもふにあまの時と成てはと思ふへし 今をとつせの人おもふや今し

又やとよみおもふはおかくはもまへて今はをやかくおもふりお格する例多 又とてもいかなれもとおもふ時はあるなり

とはてもと思ふし此時しもは同し意なり

今しはわひにし物をはつかしの山におもひ出しはしめける

続古うら風のおとしはなれぬる月のかけもあはれ

何し何そ

上何は何の体に同し 下何は下何の体をいひて二例をとる也

○或一 あるまし中なし といふ下何ま又状の注る時をいふ し を さ と思ふて

何とをも何よあて心得へし 何さへ何あるぶ 又何さへ何あるぶ

又つ〇まは 何さへ何するぶ ともいふ也

君ならさへなき人の花のあさむ宿の秋の夕くれ

拾長方 君ならさへとまらぬ夏の月のさへも雑もう色よの

極はうらみて枝なき我やさきの花さきそめしめはさへ梢めや

何し何すも 何し何りやも 何し何ありは 何も何りやも

何し何さも 何し何あらは 何し何あらは 何し何は 何し何は

何て何あらは あたなる格

さへのつゆをとめてしてわかれていよくやすまこかあり古今き

須ゝ字の歌へハさくらしかあらはといへる事をかありとふする
あらハと云うるたくひ也○岩にハ浪をといひてくちとも古今
にかゝくよむ事也岩ハ打ち寄せ波ハ砕ける事をむ
皆質とハ字ハかゝりかゝく遂合ものゝはあれハあると
かくへのとしの岩なおなる岩の打か物ゝ内概なかるとハ人ハ全
いゐしへ人をしめ人のいさゝるとも也質とハ岩を以くる事也くらく
岩根すみいを岩をいはいくさへかるしハ乃のやさ乳に岩をかしと
いへとわ打かるとうくりの文詞ハ波ハ事とかゝのゝえゝて八と
うくる公たのわりなるを近者とかそ口岩をやうを岩するゝ
ニてよひへき所ハ岩にをやよみて下の詞もゆゝまゝそて
丁のといふへもはめ白めかり国中を詠のすを事也又

縁をとらへてよみたる歌あれハ此事によるなる歌ハ又ハ云ゝて
さふとかよすへき詞の意をもしいさすへからす近き事も見ゆ
あるへしたとも見えにをやうもかゝしてそれ源氏すしもかゝくら文
文ぞとからさ事とハかたも下にしかなかてよむ事近くハやうりく
さゆと書く語をわくやもそへてよかれハ事とやうにてそよかれ
すへて物ハ物事ハ字の丁ハやすめりやとあるをいひすれ
空用の所はう丁用さいハあるとかうる心をあるかをとかる
やすめりといふ事もかくよりとか人丁ハひつにゐる岩を見て
えず又下にはもむ八をうけるをかくあり　わかりぬ例あれとかゝいはぬす
○等二ハ丁中のといひて下に付て同く助けたるをかる物にかゝりて二ありて
よこ口ハ一例と同じく丁をさしと黒字何と里同じかりきハ

「し」をめぐらしていはえて「はたらかすに」がまゝふくみもて畢る「何ハ」を

「ふかく」と聞ゆるはなかりくかなきけちめこそうつかはすらん

後 人のうへなどにも いひそめしぬるかな春さくひまなきもこそおもはれ

きこえぬもかるかる・ いまくさの花さへにぞうつろひにけれ

又ことのいはぬよりさきにかきて人し・くまの水なれやなり

何ぞ。何そ。	何ぞ。何ぞ。何ぞ。	ぞ。何そ。	何ぞ。何ぞ。何そ。
何ぞ。何ぞ。	何ぞ。何ぞ。	ぞ。何ぞ。	に何ぞ。
ぞ。なにぞ。	何ぞ。何ぞ。		

ぞ。あなかし おほかたの心

ホカ本抄

又「止家」何との六例よりふることくかき何かなく「何く何ハ」

とよあるを・とよくそらの御心はなし梅のことくとしとあらは

〇古今の序にいまにいけるものゝいはれをよみまつけれ

とのべるは心ばへをとりてかけるをかけていへる詞ぞ。

やがて此例なり。一例のうちにいへる所近着後のいひつなき

ならけるはなくひはつるあらずや〇此例のなく隈りなき二格ある

まのあつかるところを攻めていへることはりのうへそかくらいへ

よりまて「只なりける」のいはよりてなのさる事のらん心ことく病とて

茉をとのあかてかるといへることはりをかなくいかの文にはなう

よろこ藻をのいてそるをするわるをなりてとらえるひとつかし

なきとらいきの方にまことのいかる事に此例の二格也。又茉をと

さへのまつになわりしとらへき一例のあいまいなりしいつはれも端を

何いふことく「その方にて」ともあるべし

あゆひ抄巻二終